

令和6年度茨城県総合教育会議 議事録

○日 時：	令和7年2月6日（木）14時35分から15時10分まで
○場 所：	庁 議 室
○出席者：	茨城県知事 大井川 和彦 教育長 柳橋 常喜 教育委員 庄司 一子、幡谷 史朗、伊藤 道子、磯部 大吾郎

1 開 会

(事務局) それでは、定刻前でございますけれども、ただ今から令和6年度茨城県総合教育会議を開会いたします。私は事務局を務めさせていただきます、教育企画室長の富樫と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、当会議は公開となっておりますので、よろしくお願いいたします。

はじめに、本会議を主宰いたします大井川知事よりご挨拶申し上げます。

2 知事挨拶

(大井川知事) 本日は、ご多忙の中、令和6年度茨城県総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

教育委員の皆様方におかれましては、日頃から、それぞれの専門分野の知見を活かし、幅広い分野において本県の教育行政を支えていただいておりますことに、深く敬意を表する次第でございます。

さて、昨年の出生数は初めて70万人を下回る見通しとなるなど、我が国は急激な人口減少に直面しており、昨年は「2024年問題」として人手不足の影響が身近なものとなりました。

また、2023年の我が国の一人当たりGDPは、主要国中最下位に低迷するなど、国際社会における我が国の経済的地位が凋落の一途を辿る中、AI技術など科学技術は加速度的に進歩しており、世界に伍する豊かで活力ある社会を構築することが大きな課題となっております。

こうした中で、イノベーションの源泉となる科学技術「人財」の育成は極めて重要であるとともに、グローバル化が進展し、多様化する社会において活躍できるコミュニケーション能力などを備えた競争力のある「人財」の輩出は急務であります。

これまで県では、大きく変化する社会や様々な課題に対応して、社会をリードする「人財」を育成するため、中高一貫教育校を13校設置するとともに、民間人校長の活用、「IT未来高校」や「つくばサイエンス高校」の開校など、魅力と特色ある学校づくりを進めてまいりました。

また、今年度から、平日に学校外で保護者などと体験的・探究的な活動をするラーケーション制度を導入し、子ども達が自ら未来を切り拓く力を育てております。

今後、さらに「理数教育や国際教育」を充実させながら、本県が将来にわたり、活力ある社会を構築し、人や投資を呼び込むことができる「選ばれる地域」となることを目指していくため、本日は、お手元の資料にあるとおり、「人口減少と多様な社会

を生き抜く理数・国際教育について」をテーマに意見交換をさせていただきたいと考えております。

本日の会議を通じて、教育委員会と私が、本県教育の課題やあるべき姿を共有し、より一層の教育の充実につなげてまいりたいと考えておりますので、幅広い知見をお持ちの皆様方には、忌憚のないご意見をお願い申し上げます。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

(事務局) それでは、早速議事に移ります。

議事進行は、大井川知事をお願いいたします。

3 議 題

(大井川知事) それでは、早速議事に入りたいと思います。

議題の「人口減少と多様な社会を生き抜く理数・国際教育」について、柳橋教育長より説明をお願いします。

(柳橋教育長) それでは、お手元の資料に沿って、1ページ目から説明をさせていただきます。

まず、本日のテーマでございますが、「人口減少と多様な社会を生き抜く理数・国際教育について」でございます。

急速に進む人口減少、AIなどの科学技術の進展、グローバル化や、これらを背景とした人材不足の顕在化、社会の多様化など、激動の時代の中、国内外から「選ばれた茨城」づくりのため、魅力ある教育、より良い教育環境が大変重要となってまいります。

そこで、県教育委員会といたしましては、自ら考え、豊かな語学力や異文化・価値観を乗り越えるためのコミュニケーション能力を備えた、競争力のある人材の育成や、外国人材が活躍し、共生・協働できる教育環境の整備を目指すことを施策の方向性として、理数教育の充実、グローバル人材の育成、外国人児童生徒の日本語教育に取り組んでいく必要があると考えております。

次に、これらに対応する県の取り組みとしまして、資料の2ページ目に掲載しておりますのでご覧ください。まず、理数教育について、「いばらきサイエンスキッズ育成」として、小学校における理科専科教員の授業公開、科学の甲子園ジュニア県大会などを実施しております。また、「未来の科学者育成」として、スーパーサイエンスハイスクールにおいて、先進的なカリキュラム開発、大学研究室での高校生の科学体験学習を行うなど、科学に対する興味関心の向上に取り組んでいるところです。

続いて、資料3ページ目をご覧ください。国際教育では、「次世代グローバルリーダー育成」として、英語学習に意欲のある中高生を対象として、オンラインによるグループ英語レッスンや、ワークショップ式の集合研修会において、語学に加え、課題解決の力を育てております。

また、その下の「プログラミングエキスパート育成」として、専門家による個別指導、対面研修の実施を通して、全国トップレベルのプログラミング能力を持つ生徒の育成に取り組んでおります。

最後に、資料4ページをご覧ください。外国人児童生徒の支援として、日本語教育について、ブラジル人が多く住む常総市の小中学校において、日本語が話せない子供たちが安心して日本語を学ぶモデル事業を行っている他、県立高校でも7校を外国人生徒支援の重点・特例校として、日本語指導員による日本語教室などを実施しております。

資料の説明につきましては、以上でございます。本日、委員の皆様には理数教育や国際教育の今後の施策の方向性について、ご議論いただければと思います。私からは以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(大井川知事) それでは、本件を含め、教育行政全般について意見交換を行いたいと思いますので、どなたからでも結構でございますので、ご意見等いただければと思います。

それでは庄司先生、どうぞ。

(庄司委員) はい。今回、テーマは「人口減少と多様な社会を生き抜く理数・国際教育について」ということで、激動時代の到来という社会情勢を踏まえて、それから、国内外から「選ばれる茨城」づくりということで、テーマにさせていただいたと思います。

確かに、日本社会の激変・変化と平行に、学校教育現場というのも非常に激変の状況を迎えているのではないかと思いますし、それと同時に、これからの未来、子供たちの多様化というのは一層進んでいくのではないかと考えています。

私は学校教育の中でも臨床やカウンセリングが専門なのですが、県内のフレックス・スクールや子供たちの学校生活支援ということをやってきたのですが、ご存知のように、今、日本全国で不登校、いじめ、それから暴力や自殺というものが増加し続けております。また、特別な配慮、特別な支援が必要なお子さん達、教育長からのご報告にもありましたが、日本語指導が必要なお子さん達もおられまして、大体こうした子供たちがクラスに1割から2割いるという状況になっております。

このような状況において、子供たちもそうですけれども、教師が十分に対応しきれない状況が生まれているのではないかと考えております。県は様々な取組を行っており、中高一貫校設置、魅力ある学校づくり、それから特色ある学校づくりを進めてきておられますので、一定の成果が上がっていると思います。

一方で、教師自身こうした学校の教育の多様化、子供たちの多様化にどのように対応していくかということが求められておりますし、何と云っても茨城県の教育大綱にある「魅力ある教育環境」ということを考えますと、教師は、子供たちにとって一番重要な教育環境となっているのではないかと考えます。

精神疾患を抱える教師も増えておりますし、子供たちへの個別の配慮や子供たちの多様化に対応できる教師の研修や育成というのは、これから教師を希望する方達は一

層減っていく可能性も同時にありますし、私は教員養成にも関わっておりますけれども、そういう多様な状況に対応できる教員をどのように育てていくのか、それから、実際に学校で先生をなさっている方々のこうした対応力というのを、メンタルヘルスも含めて、どのようにしていくかというのが、1つ大きなテーマになっていくのではないかと考えております。

(大井川知事) はい。他にコメントありますか。

(幡谷委員) はい、よろしくお願い申し上げます。今日は、理数教育についてですが、私は全くの文系なものですから、少し今日に備えまして、理系君にいろいろと聞いてみました。皆さん口々に「理数系は好きになるよりも、まず嫌いになっちゃダメである。」ということをおっしゃっておりまして、最初の導入の所がものすごく、もしかしたら小学校とか中学校とかってというのが、1番大切なのかなと思っております。その中で、我々が安心して、このように文化生活を営むことができる日常というのは、ある意味全て、数学や物理で裏付けられた理論・理屈で生み出された結果であり、我々がこのような文化的な生活を行うことができている、それが当たり前になってしまうと、あまり理論・理屈は分からなくても、なんとなく生きていける。ただし、それはやはり数学・物理があって初めてのことであるということ、理系の皆様は私に教えていただきました。

例えば、防災に対する心構えと言っても、「注意しなきゃ」ということもそうなのですが、科学的根拠があれば、もっと減災ができたり、もっと防災の意識が高まったりするのでは、ということもおっしゃっていました。

また、金融機関の利息の計算や、損害保険の料率算定など、もう全て数学ですね。この数学の力、物理の力、科学の力、こういったものが我々の全ての今の安定的な社会基盤として成り立っている。

私が思うに、学校の中で道德教育というのがあって、みんなと仲良くしましようとか、いじめはダメですよっていう道德教育もあるのですが、それと同じぐらいに理数教育は、目に見えませんが、この理論・理屈の世界がとても大事でありまして、この両輪が回っているということ、やはり小さいうちから、道德も大事です、でもこちらの理論・理屈の世界も大事ですと、この2つがあるから、我々が今、このような生活ができているということ、具体的に子供たちに分かりやすく、学校の先生の授業の中でお示しをしていただくといいのかなと思います。

先日、IBARAKI ドリーム・パスという高校生向けの、色々なアイデアを出していただくコンテストがありました。1位になったのは、つくば工科高校でありまして、いわゆる「白杖」、目の見えない方のための白い杖に、色々なセンサーを装着して、目に見えない人が、あたかも目が見えるようにということで、様々なセンサーを働かせる、そうした試作品を作っていただきました。それを見た時に、非常に具体的に人のため、世のために役に立つというのはこういうことだということ、身をもって皆さん体験して、その中で、人のため、世の中に役に立つためにはやはり技術が必要であるということ、ものすごく皆さん感じ取っていただいたので、そういう試作品

でありますけれども、そうした色々なもので試して、それが「ありがとう」とか「良かった」、「助かった」と言ってもらえると、もっともっとやる気が出るのかなと思いました。これは高校の話ですけれども。

是非、小学校・中学校の時に、科学、技術、物理、数学、これらが今こういう形があるから、今、こういう生活ができているということ、分かりやすく教えていただくと大変良いのではないかと思います。以上です。

(伊藤委員) 教育委員の伊藤でございます。私、教育委員になって、4ヶ月で初心者マークですけれども、教育行政をよく分かっているわけではないので、身近なところから少しお話をさせていただきます。

やはり、茨城県の県央部から県北にかけては、人口減少・少子化と、医師不足は本当に深刻な問題で、医療もここ10年後、20年後を見据えて、大きく変革しなければいけない局面に来ていて、これからどうなるか、大変なところかと思えます。

私は医学部なので理数系ですが、女性にとって、医学部というのはとても向いている所なのではないかと実感しております。ちょうど研修医が終わった後ぐらいに、結婚・出産・子育てというのがあるのですが、それを30歳ぐらいまで両立していくと、ちょっと過酷な数年間はありますが、またやる気を持って職場に戻れば、自分が働きたいこともできるし、いろんな働き方があるということで、医学部は女性に向いているのではないかと実感しております。

また、国際教育についてですが、グローバル人材を育成する上では、中学生・高校生が海外留学を体験することはすごく大きな意味があるかと思えます。県でも取り組んでいるかと思えますが、私が学校医をしている学校では、同窓会からの支援によって、中学生・高校生の海外派遣が行われています。10年間の計画で、実際にはアメリカ西海岸のサンフランシスコ7日間に40名。それから台湾に5日間、40名という多くの人数が参加しています。グローバル人材の育成で、裾野を広げるような役割があるのかなと思えます。中にはひとり親家庭の、経済的に外国に行くのは無理だと考えていた生徒さんも、全額免除を取ることができまして、行くことができた。行った先では、現地在住の先輩方が色々と協力してくれまして、現地の高校生と交流したり、バークレー校を見学したりですとか、旅行では見られないような、訪ねられないような企業や大学に行くことができて、その成果を報告してくれましたが、スライドを使って英語でプレゼンテーションをしてくださって、とても意欲的に取り組まれている事業かと思えます。

また、全額免除になった子がお手紙をくださりまして、「諦めていた海外への留学だったが、とてもいい体験をすることができた」ということで、温かい話もございました。

それからもう1つ、優秀で意欲的な英語教員との出会いが、生徒のグローバルマインドを身に付ける大きなきっかけとなって、生徒の背中を押してくれるのではないかと思います。

その優秀な英語教員の育成が大切かなと感じます。ただ英語ができるようになることだけではなくて、その先に、英語ができるようになって、自分がやりたいことが見

つかるといふ、そういうグローバル人材を育てられるような英語教師や担任など、そうした指導力のある教師がいたらいいなと感じています。以上です。

(大井川知事) はい、ありがとうございます。では、お願いします。

(磯部委員) 教育委員の磯部と申します。今、工学系の大学で教員をやっている立場、それから、小学校の時に英国の現地の小学校で教育を受けたという立場、また、高校時代は、それは英国の全寮制日本人学校だったのですが、そこで教育を受けた立場として、理数教育と国際教育に関する意見を述べさせていただきたいと思ひます。

まず理数教育ですが、子供がまず理数系に進みたいと思ふ動機付けってというのがどういふ時に行われるかといふと、おそらく非常に小さい頃に、何かしら体験をする。それが「面白い。」と思ふことだと思ひます。

こういうことを話すとすごく長くなってしまうので全部は話しませんが、私は個人的に父親に、UFO が地球の北極とか南極あたりに非常にたくさん飛来するといふ、おそらく嘘情報なのですが、そうしたことを父親から聞いて、「これはひょっとして地球の磁場が関係するのではないか。」とか自分なりに、理論を展開したといふのが、今思えばおそらく、私が理数系に進んだ発端だと思ひております。

父親は全くの文系の人間だったのですが、何かしらこういうきっかけを教員の方から受けるということがとても大事だと思ひています。私は英国で小学校時代を過ごしたのですが、その時に非常に衝撃的な経験をしました。最後にウェールズといふ地方に修学旅行で行くのですが、そのウェールズといふ地域の勉強を、1年間かけてやります。何を勉強するかといふと、歴史、それから生物。どういふ花が咲いているかとかですね。それから、その地域で培われた技術ですとか、そうしたものを全て、1年間かけて小学校で学びます。そういう経験をしたことから、私が理数教育にとってとても大事だなと思ふことが、2つありまして、1つが本物に触れること。もう1つが体験と動機付けだと思ひます。

例えば本物に触れることといふのは、研究者や実務者による講演とか、体験教室、こうしたものに参加することで、かなり本物に触れることができるでしょう。

体験・動機付けの方ですが、今、大学でも流行しているのですが、プロジェクト・ベースド・ラーニングといふ「PBL」といふものがあるが、ここでは、あるプロジェクトを遂行するために必要な学習を行う。そのプロジェクトがまずありきで、それを遂行するためにどういふ知識や技術が必要なかといふことを自分達で勉強するといふ科目があるのですが、そうした進め方は例えば小・中学校や高校でも可能だと思ひますので、そうした所で行うといふのではないかと考えております。

それから、英語教育、国際教育についてですが、AI がすごく発達してきている現代において、英語を勉強する意味がどのくらい本当にあるのかといふ疑問を感じております。英語を上達することよりも、むしろ今の子供たちに必要なことは、コミュニケーション能力を高めることだと思ひます。

皆さん、お子さんを持っていらっしゃると思ひますが、すぐスマホに

かじりついて SNS をしたり、動画を観たりしていると思うのですけれども、そうしたことばかりでは、やはりコミュニケーション能力は付かないと思います。

例えば、いざ、道で困っている外国人の方がいた時に、どう助けたいかというのを能動的に行うことができない子がおそらく多いのではないかと考えています。

どう相手に「何か困ったことありますか」と伝えることができるか。それは英語がもしできれば、もちろん英語で伝えることはできると思うのですが、今の時代、英語ができなくても、例えば翻訳アプリを使うとか、それからもう身振り手振りでも、何でもできると思います。でも、それすらできない子供たちが増えているということ、私は非常に危惧しております。だから、まずコミュニケーション能力を高める教育を行って、その後例えば、欧米人、アメリカ人やイギリス人には英語で伝える、ドイツ人にはドイツ語で伝える、中国人には中国語で伝える。そういうモチベーションが上がれば、おそらくそういう言語を勉強しようという気持ちになると思います。

だから根本に戻って、どういう風に人とコミュニケーションを取ったらいいのだろう、取る能力を上げたらいいいのだろう、ということを考えるような教育をしていくべきかと、私は感じております。簡単ですが、以上です。

(大井川知事) はい、ありがとうございます。他に追加でご意見などは。どうぞ。

(庄司委員) 今、磯部委員から国際教育には基本のコミュニケーション能力が必要ではないかというお話がありましたが、やはり子供たちのコミュニケーション能力は本当に色々と大変になっておまして、人とどう関わっていくであるとか、こういうことを人に言ったり、したりしていいのかとか、そうしたことがうまくできない子供が増えている。そのことがまた、子供たちの学校教育の中での不適應につながっているということがあるので、私の分野でも、いかに子供たちのコミュニケーション能力を育てるのか、それからもう1つは、子供の暴力がすごく増えているのですが、子供たちが自分の感情をどうコントロールするかというのは、子供たちの問題の予防の2大テーマになっております。

このため、今、磯部委員から非常に大事なご指摘をいただいたのではないかと考えました。

(大井川知事) はい、ありがとうございます。他にはよろしいですか。では柳橋教育長から何かコメントはありますか。

(柳橋教育長) はい。本当に、忌憚ないご意見をありがとうございます。

特に、学校に対して外部がどう関わるかという点で、今、4人の委員の皆様からご意見をいただいた中で、特に理数教育のところは、例えば、測量の専門家、国土地理院さんなどで研究をされている方に、授業の導入的な所でも入ってもらっただけでも、小学生、中学生、高校生が、なぜ数学を学ぶのか、なぜ物理が必要なのか、宇宙で何が

起こっているのかという所に興味関心を示した事例もあるので、外部の方と一緒にや
っていくのは今の時代、本当に重要だというのを感じています。

さらに、先程、庄司委員もおっしゃっていた教員養成について、教員のバックアッ
プとして、3年目まで、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーやロイヤーさん
に、保護者対応や、子供たちの悩みをどう共有して解決していくかという時に、専門
家の方に頼るというより、そこで考え方を整理整頓する時に、非常に助けてもらっ
て、相談窓口なども設置しているので、非常に教員の方からも「助けていただい
ている」という声もいただいているところですよ。

伊藤委員から、医学部のところでご意見をいただいて、本県でも5つの県立高校で
医学コースを設置しており、当然、医師不足のところも含めて、今後も医師の養成と
いうのは強く必要だと感じているところであり、中学から高校にかけて中高一貫校で
医学コースの取り組みをやっている中では、やはり外部専門家、医学部の先生とのワ
ークショップだとか、そこで、医師の役割だけではなく、実際に医師が患者さんとど
う関わるかということ、中学生のうちから、一緒に考えていくというような勉強会
も行っており、外部と一緒に勉強する機会が増えている中で、子供たちが社会全体を
見るための力を付けていっているなと感じているところですよ。

また、幡谷委員からはプログラミング教育の所でご意見をいただいて、本県で取り
組んでいるプログラミングエキスパート事業で、全国的に活躍するような事例もでて
きておりますので、是非そのプログラミングのところも、専門家など外部と一緒に
どういう形であるのがいいのか、子供たちの声も聴きながら、教育委員会としまし
ても、進めていければいいという風に感じました。

本当に、非常に参考になるご意見を、ありがとうございます。

(大井川知事) はい。他には。どうぞ。

(磯部委員) 理数教育や国際教育という話ですと、先ほど私から、本物に触れるとか、
体験・動機付けが必要だというお話をしましたけれども、今、例えば部活動も、地域
展開が進んでいますが、理数教育や国際教育において、学校の先生だけではやはり難
しいことが多いと思いますので、地域展開をして進めていくのが良いのではないかと
感じております。

そのためには、例えば、つくば市のような、研究者や外国人の方が多いような地域
で、まず、そうしたロールモデルを作って、それを県内に広げていくというのが良い
のではないかと私は感じております。

まず小さな地域で始めてみて、それがうまくいくかどうかを検証してから、それを
県全体に広げていくというのも1つの手かなと感じています。

(大井川知事) はい、ありがとうございます。どうぞ。

(幡谷委員) 今、地域連携というお話がありましたが、去年小学校の視察に伺った時
に、外国人のお子さんがいらっやして、なかなか日本語がということで、もちろ

ん児童生徒の皆さんも学校も一生懸命寄り添っているのですが、今度は親御さんも巻き込んで、やはり親御さんが日本語を話せないと、地域でコミュニケーションが取れてコミュニティに入れないと、お子さんも孤立しがちだということで、地域でお祭りがあった時に、皆で屋台を囲んだり、皆で食事をしたり、何かもっと学校に遊びに来てくださいと親御さんを巻き込んでいます。

こうした、校長先生がリーダーシップを発揮している話も伺いまして、ここは、児童生徒の支援ではありますが、是非親御さんを巻き込んだという小学校の事例がポツポツ出ておりますので、とてもいいお話だなと思ったので、ぜひ皆さんに展開をして、加速化していただくといいかなと思いました。以上です。

(磯部委員) 今の、幡谷委員のご意見を聞いて気付いたのですが、保護者を巻き込むというのはとても大事ですね。今、理数系の女子学生が非常に減っているのが大学でも問題になっているのですが、その際に、やはり保護者の方が、自分の娘が理数系に進むとなると、「ちょっと本当に大丈夫？」ということをしてしまう家庭が多いそうです。

そうした保護者の方も巻き込んで、例えば、本物を見せてあげるとか、こういう技術はすごい、という体験をしていただく機会があると、理数系に進む女子学生が増えていくのかなと、今、幡谷委員のご意見を聞いて思ったところです。

私も、大学に持ち帰って考えてみたいと思います。ありがとうございます。

(大井川知事) はい、ありがとうございました。

大体ご意見も出尽くしたのではないかと思いますので、本日の議事はここまでとしたいと思います。

本日、様々なご意見をいただきました。なかなか、スーパーティーチャーばかりではないので、教師の力量だけに頼るといのは難しい部分もあるので、色々な仕組みも含めて、考えていかななくてはならないのかと思います。

特に、地域連携というのは、1つ良いご示唆をいただいたのではないかなと思います。国際教育と理数教育、非常に今後の社会にとって大事だと思いますし、コミュニケーションはもう大前提で、その上で、英語能力というのがあるのではないかというのは、AIがあつたとしても、これから日本の人口減少社会を考えた上で非常に重要な意味を持つてくるという風に考えておりますので、引き続き、全国の中でも、抜きん出るような特色が出せるよう、これからも皆様のご意見を踏まえながら、努力をしていきたいという風に思います。

本日はどうもありがとうございました。

(事務局) それでは以上をもちまして、令和6年度茨城県総合教育会議を閉会いたします。本日はありがとうございました。

(一同) ありがとうございました。